

白井光子&ハルトムート・ヘルのデュオリサイタル

2002年11月5日(火)7時 紀尾井ホールにて

毎年この時期に行なわれる紀尾井ホールでの白井&ヘルのリサイタルはテーマがある。今年のテーマは「女の愛と生涯を歌う」。ブラームス、ベルク、シマノフスキ、シェック、レーガ、ヒンデミット、リスト、ヴォルフ、シューマンの作品の中で歌われている様々な女性にちなむ歌が披露された。いろいろな歌い分けがあり、白井さんとヘルさんの表現力の幅の広さを感じることができた。表現力ということで、今回のリサイタルからは少しそれるが、このリサイタルの二日前に行なわれた白井&ヘルによる公開レッスンも拝見(拝聴)した。私は昨年が続いて二度目の聴講である。このレッスンは休憩はなく、長時間にわたる。密度が濃く、観客席に座っているだけでも終了後はかなり疲れを感じるが、一方で非常にマニアックな知的刺激を与えてくれるものである。病み付きになりそうな面白さがある。その一つに、ヘルさんによる例示演奏がある。生徒さんに代わってヘルさんが同じところを弾いたとき、何度か会場からどよめきとも、ため息とも言えるものが聞こえた。歌は歌詞もついていし、声はいろいろ変化させられるし、表現力が大きいことは納得できる。しかしヘルさんのピアノは、ピアノも歌と同等に、場合によってはそれ以上に表現力を持つことができることを証明してくれる。とにかくヘルさんのピアノはよく語る。

さて、リサイタルに話を戻すとこの夜のメインはやはりなんといっても、最後に配置されたシューマンの「女の愛と生涯」だったのではないかしら。少なくとも私は一番これを期待して聴きに行った。この曲については、この二人の演奏で1982年に録音されたCDがありこれはすでに何度も聴いた。また、1998年にもリサイタルで演奏されたことがありこれも聴いている。98年の演奏について詳細は忘れたが、比較的同じ時期に聴いたバーバラ・ボニーの同曲の演奏との対比で鮮明な印象となっていて残っていることが一つある。ボニーの演奏は非常にロマンチックで、最後の後奏の部分では美しい回想がなされていると感じた。これに対して、白井&ヘルの演奏ではこの後奏の部分で何かしら非常に厳しいものを感じた。今回はどのような演奏を聴かせてくれるのか、とても興味があった。

第1曲:この曲は最後の曲の後奏にも登場するというのもあって、それとどのように違うのかを聴き分けてみたいと思っていた。そのため、記憶にとどめようと慎重になった。「私が彼をみた時から私はめくらになったと思います」という歌詞で始まるこの歌に関しての私の抱いていたイメージは、乙女の初々しい恋心を、乙女自身がはにかみながら告白しているというものだった。ところが、白井さんの歌を聴いて「あれっ」と思った。どうも私の持っていたイメージとは違うように感じたからである。即ち、乙女の恋心を、既に一曲目にして回想しているように聞こえたからだ。つまり歌っている(語っている)主体は、かつて乙女だった人だと感じた。なぜだろうという印象を即座に抱いた。第2曲は、歌っている主体は、恋人に思いを募らせる乙女そのものであり、情熱的なものを感じた。つまり、序章は回想から始まり、その扉を開けると過去の世界に入っていた、という感じを受けた。ヘルさんの伴奏は非常に自在であり、乙女の気持ちの変動を表わしているかのようだった。第3曲:この曲ではテンポの変化が印象的であり、それが、この曲の内容、すなわち「信じられない」という喜びを非常によく表わしていた。第4曲は、第3曲の短い後奏からすぐに連続して演奏された。この間合いが結構新鮮に感じられた。白井さんの歌は、穏やかな喜びに満ちた気持ちを十分に表現していた。白井&ヘルの演奏はどちらかというと非常に考えさせられたり、刺激的であったりということが多く、穏やかに聴くということが少ないように私は感じているのだが、この曲に関しては穏やかな幸せを感じながら聴けた。第5曲:この曲についてはあまり印象は残っていない。レガートな歌い方と畳みかけるような歌い方、相反するようではあるが、その両者を感じた。第6曲:この曲を聞かずに、何か間延びしたような感じを覚える。しかしこれがシューマンのイメージしていた「平穏な幸せ」なのかもしれないと思う。思いはつつい、「シューマン自身はどのくらいこのような幸せに

浸ることができたのだろうか」という想像に駆り立てられる。この日の演奏はというと、あまり間延びした印象は受けなかった。一つには白井さんの歌い方が細かいところまで行き届いていたことがある。そして、具体的な変化を楽しませてくれたのはヘルさんの伴奏。第2詩節と第3詩節との間の間奏はたつぷりと表情豊かに聞かせてくれた。そして、続く第3詩節の前半部のゆったりとした歌を効果的に導いた。そして、女性の主体的な意思を表わすかのような、かなり早いと感じられる歯切れのよい後半部(Bleib' an meinem Herzen から)は印象的だった。第4詩節は元のテンポに戻ったが、ここでは一番最後の Dein Bildnis! (あなたのおもざしが!)という言葉に優しさが溢れていた。第7曲:この曲でもまた、ピアノ伴奏が印象的だった。テンポの変化が非常に面白かった。ただ、それが子供を得た喜びを歌ったこの曲とどう結びつくかはイメージしきれなかった。第8曲:前曲からすぐに続いて、ピアノの鋭い和音が鳴った。それに引き続く白井さんの歌もすごい緊張感が漂った。元々音の動きの少ない曲ではあるが、Du shlaefst, du harter, unbarmherz'ger Mann, den Todesschlaf.というところでは白井さんの歌はほとんど独白のように感じられた。その後の第2詩節は、歌詞が示すように白井さんの歌は茫然自失とした主人公をリアルに表現していた。やはり、歌というよりうつろな独り言だった。第3詩節で音はさらに低くなり、よりいっそうその傾向を強めた。すごい迫力である。最後の言葉、Du meine Welt!というのは、低いうめきのようにも聞こえた。この緊張感の中での、最後の後奏は、かみしめるように、訥々と第1曲目のフレーズを奏でた。時々止まってしまいそうになるような、大胆な休符の取り方が印象的だった。同時に、和音の上昇音型が一つ一つクリアーで、万感の思いがこみ上げてくるかのような印象を受けた。この後奏のさなか、白井さんは呆然としたしたまま、頭をかすめる、或いはわき上がる回想に身を任せているかのようにだった。そして、すばらしい緊張感の中で静かに曲は終わった。聴衆もしばらくの間固唾をのんだままだった。

今回の演奏は、CD録音のものとはかなり異なる。また、98年に聴いた演奏とも、傾向的には同じかもしれないが、より先鋭化しているという点でおそらく異なっていると思われる。数年前に聞いたシューベルトの冬の旅、今回のシューマンの女の愛と生涯、いずれも楽しむ演奏というのは次元が異なるが、非常に印象深い演奏であることに違いはない。解釈が深まり、表現力が増した今、是非、もう一度これらの曲の録音をして欲しいと願う次第である。

2002年11月下旬記 寺内 かえで